

ノ ー ト

女子栄養大学・家庭科教職課程履修生の教育実習に関する考察

櫻井 純子*¹ 天野 幸子*² 尾崎 沙和子*³
小澤 滋子*⁴ 板谷 幸恵*⁵

A Study on Student Teaching of a Teacher-Training Course of
Home Economics at Kagawa Nutrition University

Junko SAKURAI*¹, Sachiko AMANO*², Sawako OZAKI*³,
Shigeko OZAWA*⁴ and Sachie ITADANI*⁵

The aim of this study is to investigate the actual situation of student substitute teaching and students' awareness of a teacher-training course of home economics at Kagawa Nutrition University and to get some clues to improve our teacher education program. The period of teaching by students is now 3 or 4 weeks under the revised law of the teacher's certificate, though it was 2 weeks till last year. The writers compared the practice of 2-week student teaching with that of 3 or 4 weeks and found some trends common to both. For example, there were diversities of teaching styles, and hours of actual teaching. Most students understood the importance of general education, learning at secondary school, and teaching skills for people. They also thought what the role of the teachers they idealized was and what the profession was.

はじめに

教育実習は教育実地研究ともいわれ、それまでに教職に関して学んだことを、中・高等学校の教育現場で展開・実践することである。いわば、教職課程履修生にとって大学で学んできた学問の成果を自己実践と結びつけ、自己検証をする重要な機会ともなり、それまでの学びの総仕上げ的な役割をもつともいえよう。

本学においては、各学生は4年次で3～4週間、主として各自の出身校(中又は高校)で教育実習を行っており、経験の中から教えることの難しさをはじめ、多様なことを学び取っている。特に、本年度は教育実習期間が従来の2週間から3～4週間となった最初の年度でもある。

実習期間の延長については、意味があるとする見方の一方では、それがどれだけ教師としての資質向上につながるのか、あるいは学校現場並びに大学に過重負担となるのではないかなど、文部省(当時)からそれが示されて以来、論議がなされてきた。

確かに、教師には社会の変化やその時代を反映して、極めて多岐にわたる資質・能力が要求される。特に近年、問題行動など生徒の変化がみられ、教育臨床的な能力や教育改革のもとでの学校や教育の有り様への対応など、教師として求められる能力は多様化、拡大している。

このような状況の中で、本学においても現在求められている教師に必要な資質・能力の育成を目指し、教職に関するカリキュラム及び教育実習事前指導の内容等の検討をすすめ、改善を図ってきている。また、これらを視野に入れ15年度の教育実習の事前指導等を計画してきた。本研究は、3～4週間の教育実習において学生がどのようなことを感じ、会得したかを明らかにし、また何が問題なのかを探り、本学における今後の教師養成の一助とすることをねらいとして行われた。

本稿では、以上のねらいのもとに次の3時期に収集した資料等の分析により、教育実習の概況を把握し学生の意識の変容を明らかにする。

(1) 教育実習前: 教育実習事前指導終了時点における学生の記述

*¹ 家庭科教育学研究室, 女子栄養大学: Education of Home Economics, Kagawa Nutrition University.

*² 教育心理学研究室, 女子栄養大学: Educational Psychology, Kagawa Nutrition University.

*³ 教職第二研究室, 女子栄養大学: Teacher Education (2), Kagawa Nutrition University.

*⁴ 教職第一研究室, 女子栄養大学: Teacher Education (1), Kagawa Nutrition University.

*⁵ 介護・保健学研究室, 女子栄養大学: Care and Health, Kagawa Nutrition University.

(2) 教育実習中：学生の教育実習録，実習生が自分の授業実践について生徒に求めた感想や意見の記述，本学教員による実習校訪問指導報告書

(3) 教育実習終了後：教育実習報告会における学生の实习报告書，意見変容に関する学生への質問紙，実習校からの報告書

なお，15年度の3ないし4週間実習の特徴や問題点を明確にするために，12年度の2週間実習の際の資料の分析をも関連する個所で適宜加えた。12年度の資料を用いた理由は，それが比較的整備されていたこと，それ以前の年度の教育実習の形態や構成とほぼ同様であることからである。

I 女子栄養大学・栄養科学専攻教育実習の位置づけ

1. 教職課程カリキュラム

平成10年の教育職員免許法の改正にもとづいて，栄養科学専攻では，家庭科・中学校ならびに高等学校教諭一種免許状取得のために，表1のように，カリキュラムが編成されている。表1は「教職課程履修の手引き」ならびに「履修要綱」から作成したものである。

15年度から実施された教育実習（5単位）については，教育実習事前指導ならびに教育実習事後指導（報告会を含む）が「教育実習指導」（1単位）として4年次前期に，「教育実習Ⅰ」（2単位）ならびに「教育実習Ⅱ」（2単位）が4年次後期に配置されている。実際の運用は事前指導を，4年次の4，5月に集中講義で行い，すべ

ての実習生の実習校での実習に備え，ⅠならびにⅡは中学校あるいは高等学校での3～4週間の学校現場での実習とし，その後，実習後の報告会を中心として事後指導を行うという状況である。12年度の教育実習は3単位の中で事前・事後指導と実習校での2週間の実習を含む構成であった。

学年配置に示されるように，教育実習は，大学における専門分野科目（主として教科に関する科目），教職に関する科目，共通分野科目のほとんどを修めてから実施するということになる。このことは，12年度の場合と同様である。その理由は，それぞれの実習校における実習生が授業実践を円滑に進めていくことができるようにというねらいとともに，ひいてはそれらが大学教育の評価とも関連するからである。本学科学専攻教職課程では，後述のように，かねてから事前指導の内容を吟味し，学生の実習に向かう意欲・関心を高めるようにしてきた。それらについては尾崎，小澤らが本学紀要第18巻（1987），第19巻（1988），第20巻（1989）で明らかにしてきた。

2. 教育実習のねらい

教育実習のねらいのとらえ方として，鈴木慎一氏によれば二つに大別される。一つは，教育実習を教員養成の教育の総仕上げとする見方であり，他の一つは教育実習を教職に対する自己の適性の診断や自己検証の機会とする見方である。それぞれについて，鈴木慎一氏は次のように説明する。まず，前者は，「教科に関する科目の

表1 開講科目一覧（平成12年度入学生）

	1年		2年		3年		4年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
家庭科 教員 基礎 教養	調理学実習Ⅰ 1 食生活論 1 栄養科学概論 2	栄養学総論 2 食品学総論 2 食事計画実習 1	食料経済 1 栄養学各論 2 食品学各論 2 食品衛生学 2 情報処理学実習Ⅰ 1	介護論 2 調理学 2 情報処理学実習Ⅱ 1	家族関係学 2 衣構成学実習Ⅰ 1 衣構成学実習Ⅱ 1 衣材料学 2 住居学Ⅰ（製図を含む） 2 情報処理 1	栄養科学特論Ⅱ 2 I（栄養士関係） 家庭経営学 2 （家庭経済学を含む） 衣環境学 2 衣構成学実習Ⅱ 1 住居学Ⅱ 2 保育学（実習及び家庭看護を含む） 家庭電気・機械 1		
			教師論 2	教育原理Ⅰ 2 発達と学習の心理学 2 家庭科教育法Ⅰ 2 教育方法及び技術Ⅰ 2	教育原理Ⅱ 2 家庭科教育法Ⅱ 2 道徳教育研究 2 教育方法及び技術Ⅱ 2 教育相談 2	家庭科教育法Ⅲ 2 特別活動研究 1 生徒指導論 2 進路指導論 1 総合演習 2	教育実習指導 1	教育実習Ⅰ 2 教育実習Ⅱ 2
	保健体育実習Ⅰ 1	保健体育実習Ⅱ 1	保健体育実習Ⅱ 1	日本国憲法 2 外国語コミュニケーション 2 栄養科学特論Ⅲ（介護等体験） 2		栄養科学特論Ⅱ（教職論） 2 栄養科学特論Ⅲ（介護等体験） 2		

学習と教職に関する科目の経験課程における統合と、教職につく場合に予想される専門的実践的力量形成上の個別的課題を発見し、その解決を目指した継続的学習あるいは研究の素地をひらくところに、基本的な意義がある」とする見方であり、後者は、教育実習を養成教育の総仕上げとするのではなく、自己診断、自己検証の機会であるとともに「教職に就かない場合でも、広く教育一般と教職について経験を媒介として学習する機会である」とする見方である。

鈴木氏は、概して目的養成課程においては前者が、一般大学の教職課程においては後者のとらえ方が多いとしている。

目的養成課程では、教育実習は4年次のみではなく、他の学年次に実施する大学も少なくはない。そのような場合、特に4年次の教育実習は養成教育の総仕上げ的な位置づけにもなる。一般大学の場合、4年次に法的に定められた単位で教育実習は実施されることが多く、教育実習は、学生にとって、それまでの被教育者としての立場ではなく、教育者（教育実習生）としての立場から

学校教育にふれる重要な機会となり、それを通して、自己の適性の判断や自己検証をする場になっているといえる。

本学の場合、教育実習は、これらの双方を含むものである。カリキュラムの学年配置から見れば、それまでの教育の総仕上げ的性格はある。しかし、そればかりではない。教育実習を通してそれまで大学で学んできた主として理論的な事柄を実習校での授業や生徒の指導等どのように結びつけるのかを学生が主体的に考え、実践し、考察する機会とすること、ならびにそれらの経験の中で自己の教職への適性の判断や自己理解を深める機会とすること、をねらいとしているのである。

II 教育実習事前指導

1. 事前指導のプログラムとねらい

平成15年度の教育実習事前指導は4月7日から4月19日まで、8日間の集中講義として行った。表2にそのプログラムを示した。

教育実習事前指導の計画にあたっては、教職に関する

表2 平成15年度 教育実習指導（事前・事後）日程表
栄養学科専攻（家庭科）

月・日	I (9:20~10:50)	II (11:00~12:30)	III (13:20~14:50)	IV (15:00~16:30)
4月／7日 (月)	実習上の事務手続き 天野・板谷・西窪	教育実習のあり方 櫻井 純子	情報機器活用の授業 石井 和 <コンピューター室I>	
8日 (火)	食物の指導 松本 伸子	教育実習生への願い 中・高の教育現場から 東京女子体育大学 吉野 尚也	住居の指導 尾崎沙和子	
9日 (水)	保育の指導 青木 菊麿	道徳の指導 女子栄養大学(非) 荻原 武雄	教育実習の意義 小澤 滋子	
12日 (土)	乳幼児理解の学習 埼玉県立蓮田高等学校 河森 明子	家族・家庭生活の指導 さいたま市立大宮北高等学校 田村 京子		
14日 (月)	調理実習の指導 松田 康子 <調理実習室>		学校給食・食育・地域 石田 裕美	教職にかかわる法規 小澤 滋子
15日 (火)		特別活動の指導 青山学院大学(非) 塩田 正行	自己表現の時間 天野・尾崎・小澤・田代	
16日 (水)		授業と構成と学習指導案 櫻井 純子		実習録の書き方 天野 幸子
19日 (土)	家庭科の学習指導 埼玉県立滑川高等学校教頭 深谷 敬子			
7月／17日 (木)	教育実習報告会 櫻井 純子 他			

<実習以外の教室>

4/7, 12, 19日: 4301番教室

4/8, 9, 14, 15, 16, 7/17日: 1402番教室

表3 平成12年度 教育実習指導(事前・事後) 日程表
栄養学科専攻(家庭科)

(教室, 1号館42番)

月・日	I (9:20~10:50)	II (11:00~12:30)	III (1:20~2:50)	IV (3:00~4:30)
4/17 (月)	教育実習受講のあり方 櫻井 純子	家庭科の指導のあり方 櫻井 純子	調理実習の指導 小川 久恵	
4/18 (火)	学校給食の指導 鈴木 久乃	教育機器の扱い方 尾崎沙和子		家族関係・家庭経営の指導 濱本知寿香
4/19 (水)	教育実習と学校の実際 小澤 滋子	教職にかかわる法規 小澤 滋子	青少年の心理 天野 幸子	登校拒否・いじめ・非行生徒 の指導と人間のこころ 天野 幸子
4/20 (木)	中学・高校の教科 指導と特別活動 佐原 寛治	中学・高校の生徒指導と 学級(HR)経営 佐原 寛治	情報機器活用の授業 高橋 勝美	
4/24 (月)	実習録の書き方 実習直前の注意 板谷 幸恵	住居の指導 尾崎沙和子	食物の指導 松本 伸子	実習上の事務手続き 板谷 幸恵
4/25 (火)	保育の指導 青木 菊麿	住居の指導 尾崎沙和子	中学・高校の家庭科の授業について 小澤 容子	
7/4 (火)	教育実習報告会 9時20分~12時30分			

科目及び教科(家庭)に関する科目の講義だけでは不十分、と思われる学校現場のもつ問題や生徒の実態について理解を深める内容を取り入れることに留意した。この点は表3に示す12年度の事前指導の場合と同様である。変化する教育課題に対応するよう毎年プログラム検討を加え、14年度より、コミュニケーションスキルを磨く一つの手がかりとして「自己表現の時間」を設けた。また、今日の子供の生活や意識を反映した生徒指導に関わる事柄の講義については、学校現場の教員に講師を依頼した。

2. 受講した学生の意見分析

15年度では全プログラム終了後、有意義と思われる講義、並びに教育実習に向けての心構えという二つのテーマで学生にレポートの提出を求めた。それぞれのテーマ毎に学生のレポートを以下のようにまとめた。

(1) 有意義と思われる講義

- * 本学の先生方とは異なる視点からの外部の先生方の講義を聞き、教職の意義を一層強く感じた。
- * 学校現場の先生方の話は実際の教師の仕事を感じることが出来た。
- * 教育実習のV.T.Rはあのように授業が出来るか不安ではあるが、大変参考になった。
- * 食教育の重要性と家庭科教諭の役割を自覚した。
- * 模擬授業で、教師の立場も体験できたことは貴重な財産となった。
- * 友人の模擬授業を見て改善すべき所がよく見えた。
- * 授業の構成と学習指導案との関連を改めて学んだこと

により、不安が薄れ、「うまくいこう」という思いに変わり、教育実習への自信がついた。

- * 自己表現の時間は、一人一人の発表の機会を得ただけでなく、友人達の考えも聞くことが出来た。練習できてよかった。

学生の受講後の感想は以上に示したように、中学校、高等学校の実際の教育現場が身近に感じられ有意義であったとしている。しかしながら現在、全私協(全国私立大学教育課程連絡協議会)及び関私協(関東地区私立大学教職課程連絡協議会)等で、取り上げられているセクシュアルハラスメントの諸問題も事前指導プログラムにどのように組み入れるかが今後の課題である。

(2) 教育実習に向けての心構え

- * 人として生きて行くことに欠かせない、「対人関係を作ること」の大切さを学ぶことが出来た。精一杯がんばろう!
- * 様々な教師の仕事積極的に吸収したい。自分のやるべきことを一つ一つ確実にやり、素直な心で学び吸収したい。部活動など授業以外の活動にも参加し、悔いのない実習をしたい。
- * 教室の中であれ、外であれ、学校はコミュニケーションの場、交流の場なのであるから、生徒とのコミュニケーションがうまく行くように心掛けたい。生徒を好きになり、一人一人を見よう、それが教室の授業につながる。
- * 生徒の心に届く授業がしたい。わかりやすい、楽しい授業にしたい。教え込みではなく、興味を惹きさせる

授業の重要性がわかった。授業のポイントを学ぶことが出来たので心強い。教材研究を十分に行い、指導案を作成する（書けるだろう、自信がついた）。

*自分が大学で学んだことを伝えられる喜びを感じている。楽しいだろう。

*不安や焦りがあったが自分がやるべきことが明確になった。十分に事前の準備をすれば、自信がつく。気を引き締めてやろう！期待もできた。

*教育実習生(教育をする立場)としての自覚ができた。「教える」ことよりも、生徒から学ぶことであり、感謝の気持ちを忘れないことである。ご指導頂く先生とよく相談して授業をすすめること。

*「教育実習に行くのだ」という気持ちが湧いてきた。生徒の立場に立って考える「教師」でありたい。

以上に示したように事前指導を受けた学生の自由記述からは、教育実習に向けた期待と意欲的な構えが形成されていった様子がわかる。

Ⅲ 教育実習（観察・参加・実習）

実習校における「教育実習」の構成を大まかに分類すると、観察・参加・実習に分けられる。観察は指導教諭他、他の教員の教育実践を客観的に観察すること、参加は指導教諭等の教育実践を手伝ったり、授業に参加すること、実習は自らが授業を担当するということであり、いわば、実習はこの三者の相互作用で構成されることになる。

1. 教育実習の概況

平成15年度栄養科学専攻の家庭科教育実習生は62名である。

教育実習校は、母校実習を原則としているので、平成15年度は、全員出身校で実施した。教育実習校を地域別にみると、表4・表5に示すように、北海道から沖縄まで17都道県と広範囲であるが、埼玉県、東京都、神奈川県及び千葉県での学校が55%を占めており関東地域に集中している。また、学校種別にみると高等学校での実習が約70%を占めている。

ここでは、15年度の3ないし4週間実習の内容的特徴を明確にするために、平成12年度のデータと比較参照した。これによると、教育実習校の地域は、12年度、15年度共に関東地域に集中している。また都道府県別にみると、12年度11都県であったものが15年度は17都県と範囲が全国に広がってきている。学校種別にみると、本学学生は、例年高等学校での実習が多く（12年度は中学校23%高等学校77%）、15年度は中学校実習の割合がやや増えている（7%）。このことは、実習期間の延長によって、高校での実習が受け入れられにくかったからと思われる。

実習期間は、15年度62名中1名の4週間実習を除いて61名が3週間であった。なお、実習時期はほとんどが5月から6月中であった。

表4 平成15年度「家庭科教育実習」実施校状況

(数字は人数)

学校種 所在地	中学校		高等学校		合計
	公立	私立	公立	私立	
北海道			1		1
宮城県	1				1
福島県			1		1
茨城県	1		2	1	4
栃木県	1		3	1	5
群馬県	2		5		7
埼玉県	7		7		14
千葉県	2		2		4
東京都		2	7	4	13
神奈川県			1	2	3
山梨県	2				2
長野県	1		1		2
新潟県			1		1
静岡県			1		1
山口県			1		1
熊本県			1		1
沖縄県			1		1
合計	17	2	35	8	62

表5 平成12年度「家庭科教育実習」実施校状況

(数字は人数)

学校種 所在地	中学校		高等学校		合計
	公立	私立	公立	私立	
北海道			1		1
茨城県				1	1
栃木県	1		1		2
群馬県	2		3		5
埼玉県			15	1	16
千葉県	1				1
東京都		2	5	1	8
神奈川県	1	1	1		3
長野県	1		1		2
静岡県			2		2
広島県	1				1
合計	7	3	29	3	42

授業実習の担当時間は、表6・表7に示す通りである。15年度並びに12年度ともに中・高校とも10～19時間に集中している。なお、12年度の場合、1～9時間の担当者が多く、15年度は20時間以上の担当が多い。さらに、高校において、2時間から44時間までの大きな幅があり、これも、3～4週間実習となって目立ったことである。

担当授業の授業形態を見ると、15年度は、中学校においては、「実習」が中心であり、「講義」を全く担当していなかった者が5名あった。「実験」については、殆ど担当していない。高校については、全員「講義」を担当し、また殆どの者が「実習」も担当している。「実験」担当は、5名にとどまっている。12年度では中学・高校

表6 平成15年度 授業実習の実施状況

(数字は人数)			
時間数	中学校	高等学校	合計
1～9	4	5	9
10～19	9	19	28
20～29	4	12	16
30～39		2	2
40～44		2	2
合計	17	40	57

* 中学2名高校3名は9月以降実習のため含まず

表7 平成12年度 授業実習の実施状況

(数字は人数)			
時間数	中学校	高等学校	合計
1～9	7	5	12
10～19	2	17	19
20～29	0	9	9
無記名		1	1
合計	9	32	41

共に「講義」が中心（中学校9名中8名，高校32名中29名）であり，高校では，2/3以上の者が「実習」を担当していた。

家庭科の担当内容をみると，15年度の中学校では「家庭分野」の内容「A 生活の自立と衣食住」のうち「栄養を重視した食生活」が最も多く（延べ106時間），次いで「簡単な衣服の製作」（延べ71時間）に集中している。12年度では殆どが「食物」（延べ51時間）及び「被服」（延べ14時間）の内容である。

高校では，1年生の授業で「生活の科学と文化」（延べ211時間）を担当している。2，3年生は，「食生活の設計と調理」（延べ153時間）及び「衣生活の設計と被服製作」（延べ114時間）を担当している。12年度では，「食生活の設計と調理」（延べ121時間），「衣生活の設計と被服製作」（延べ71時間）と担当内容の傾向は15年度とあまり変わっていない。6月に実習をする場合，学校のカリキュラム編成の都合から，食物や調理の内容が取り扱われることが多いようである。研究授業においても12・15年度ともに上記と同様の内容を担当している。15年度は「高齢者の生活と福祉」に関する内容も加わってきた。

実習中，本学学生が栄養学専攻ということもあって，その専門性を生かした食に関する分野を受けもつことが多い。しかし家庭科教員をめざすためには，家族・家庭生活の内容を中心とした衣食住全般に関する専門的知識・技術の習得が望まれる。

さらに家庭科教育の全体の問題として，社会の教育課題となっている高齢者・福祉，及び保育に関する内容も増加してくると思われ，それへの対応も必要であろう。

教科外の参加状況については，表8・表9に示す通りで，15年度中学校では学級活動，学校行事，クラブ活動

表8 中学校教科外活動参加状況

	平成12年度	平成15年度
学級活動	5	8
学校行事	7	13
クラブ活動	5	33

(件数)

表9 高等学校教科外活動参加状況

	平成12年度	平成15年度
ホームルーム活動	36	34
学校行事	34	60
クラブ活動	22	29

(件数)

等であった。ショートホームルームは，中・高校共，出席確認，連絡事項などが中心であった。15年度の高校のホームルーム活動では，本来の集団生活や社会の一員としての学習の他，「将来の生き方と進路」のテーマのもとに本学の紹介を行った実習生も多くみられたのが特徴的で，3人に1人が行っている。また，12年度と比較すると，種類では大きな変化はみられないが，15年度は体育的クラブ活動の参加や，創立記念日・慰霊祭・壮行会・文化祭・体育祭のようなそれぞれ特徴的な学校行事への参加件数の割合が増加している。特に儀式的行事及び健康安全・体育的行事への参加が多くみられたことが注目される。

中学校「道徳」の授業に関しては，65%の学生が担当していた。

なお，中学校では14年度，高校では15年度に導入された「総合的な学習の時間」の参加状況を見れば，中学校での実習者の1/3が参加している。内容は「グリーンアドベンチャー資料づくり」「修学旅行のまとめ」「遠足の新聞作り」「福祉ハンディキャップ」「インタビューウォークラリーの事前指導」「視聴覚教材のまとめ」等である。

2. 教育実習の実際

(1) 実習生の授業の変容

(i) 分かりにくい授業

<実習生の授業>

実習生にとって実習校での最初の授業は特に意欲を持って臨むわけだが，実際に授業をしてみると最初に思い描いていた通りにはいかないことを誰もが経験する。実習生の実習期間当初の授業の感想を教育実習録から拾ってみると次のようである。

* 指導案は作成して完璧だと思っていたのだが，その通りには進まなかった。

* 生徒の顔を見られず，一方的に授業を進めてしまった。

* 教材研究が不十分だった。

* 机間指導では生徒にどう関わったらよいのか分からな

かった。

*内容に自信がもてず声が小さくなり、おどおどしていた。

*板書が見にくかったといわれた。

*時間がのびて、生徒がざわついた。

以上から、実習生の初めの頃の授業は、授業を受ける生徒にとって分かりにくいものであったことが伺われる。また誰もが授業をすることの難しさを感じていることが分かり、これらから教材研究の重要性が指摘できよう。

<教材研究とは>

教材研究とは以下のように考えられる。「教材研究とは、つねに授業を前提とし、授業を展開するのに役立つように、教材を解釈し、構成し、組織する実践活動である」²⁾が、教材研究の意味を実際の授業に当てはめると以下のようになる³⁾。

- ①教える内容について正しい知識や技術を習得する。
- ②教科の目標及び領域の、単元の目標を心得、本時の位置づけを確認し、そのねらいを達成すべく、時間の配分を考えながら生徒の実態を掌握して指導計画を立てる。
- ③適切な資料等の用意（選択及び作成）をする。

「教えることの難しさ」を経験した多くの実習生は、その原因として、<教材研究の不足>に気づくと同時に、「授業は生徒が主体となるもの」で、そのためには<生徒との関わりが大切>であることにも気付いていく。

それでは、「分かりにくい授業」はどのようにして生徒にとって知的満足や充足感を伴った「分かりやすい授業」に変容していくのだろうか。実習期間中授業を担当する実習生は、何を克服・改善し、何をつかみ取っていくのだろうか。

教育実習録や実習報告会資料の中からその手がかりを見つけることにする。

実習録は、実習生の日課表と観察（参観）・参加・実習を中心とした記録欄、指導教諭の所見や批評の欄からなる。授業に関しては指導教諭からその日のうちに注意や指導を受けることが多く、この欄には概ね授業の反省点やその日の課題・疑問点などが書かれる。指導教諭からは実習生からの質問や疑問に対する回答、また授業のあり方や家庭科観等、大所高所からのコメントも記される。実習生は日誌を通して自分自身を見つめ、指導教諭からの指導や助言を受けながら自己をふりかえり、悩みながらも日々成長していく。一方、指導教諭自身にとっても日々の実践をふりかえる機会になっているようである。

また実習報告会の資料からは、実習を通して一番感じたこと・学んだことなど、各人の意識の変容をうかがうことができる。

それらの記録や資料を概観したところ、授業が変化する要因には、指導教諭－実習生－生徒の三者間の関わりが大きいことが読みとれた。

ここでは、一つの例としてある実習生の授業に焦点を

あて、変容の様子を構造的に捉え考察する。この学生は、教育実習の自らの授業時に授業を受けた生徒から感想を得ている。また実習録からは授業に関する他の、指導教諭や生徒と接した折の自分の考えも記しており、比較的資料が整えられており、そこから具体的に実習生Aが変わっていく様子が読みとれたからである。

実習生Aの行った授業のテーマは「結婚と法律」である。事前に指導教諭の授業を2クラス参観（1週目の火曜日）した後、木曜日にそのテーマで初めて授業に臨んでいる。本稿で取り上げるのは「結婚と法律」に関する本人の授業で、最初の授業実習と3週目火曜日に行った3回目の授業である。1回目の授業に関しては実習録に書かれた反省事項から、また3回目の授業は生徒の感想と実習録を参考にして考察する。

(ii)「分かりにくい授業」の要因

1回目の授業から第一に指摘できることは、教材研究の不足である。

<教材研究不足>

多くの実習生がおこなってしまう「分かりにくい授業」について、実習生Aの場合、その時の生徒の様子や自分の気持ちを次のように率直に書き記している。

「人に何かを教えることが如何に難しいかを知りました」「余裕がなくなって、気持ばかりが先走ってしまい、一人で大混乱でした」「途中で生徒がおしゃべりを始めたので、生徒が飽きてしまっているのに気づきました」「生徒が飽きてしまうのは、私の授業に魅力がないということなのでしょうか」「先生のいう通り、生徒の顔を見ずに授業をやってしまったのが飽きさせてしまう原因だったように思います」

そして次回への課題として、実習生Aは内容をよく理解しておく、生徒を引きつける話し方や対応の仕方を工夫する、生徒の実態を把握し、時間の配分に気を付ける、の4点を挙げている。

その日の指導教諭からのコメントは以下のようなものである。「初めての授業、緊張したことと思います。お疲れ様でした。上記にあるように様々な課題が残りましたネ。生徒の反応（おしゃべり）には生徒側の問題（はじめから学習意欲に欠ける）と教員側の問題がありますネ。今回生徒が見えず、一人で授業していたのだと思います。生徒と作り出すものであることを忘れないでください。次の授業にこの反省を生かしてください」と、先ず実習生にねぎらいの言葉をかけ、「生徒のおしゃべり」についてはその原因を見極める必要があること、また授業に関しては、「生徒と共に作り出すもの」とであるという基本的な考え方を示唆している。

以上、実習生と指導教諭のやり取りから、そのほとんどが教材研究が不十分であったというところにたどり着く。

「分かりにくい授業」の問題点を授業者側からまとめるとおおよ次のようになる。

①授業内容の理解が不十分で、生徒に伝えたいこと、考

えさせたいことが伝わらなかった。

②生徒の実態を無視し、対象者に対応した話し方や指導の仕方ができなかった。

③時間の配分が適切ではなかった。

(iii) 「分かる授業」への変容

3回目の授業では、生徒との関わりがポイントとなっている。

＜生徒との関わり＞

実習期間中、実習生Aは、家庭科教諭の担当クラスで朝と帰りのホームルーム及び清掃指導を担当、またクッキング部を手伝い、体育祭では準備はもちろん、当日でも記録係として積極的に参加している。そのような生徒との日々の活動、あるいは生徒への様々な働きかけが、実習生と生徒の関係を良好なものにする。実習録の中に生徒に関する内容が随所に見られることから、毎日が生徒と共にあったことが裏付けられる。

教育実習の場合は、上述のような関わりを通して、生徒が実習生に親しみをもち実習生を理解し、「授業を分かろうとする姿勢」を生み出すことになり、実習生にとって、ある種の手応えを感じる授業へとつながる。

それは、前回の反省をふまえて改善した（説明の仕方や板書の表現）結果、「緊張しすぎ」「黒板が分かりにくかった」等やや否定的な感想であったものが、「分かりやすかった、楽しかった」等、肯定的な表現が多く見られるものに変っていたことから理解できる。

＜指導教諭の授業観＞

実習生Aは実習期間の半ばに、指導教諭の教材研究にける情熱に驚き、次のように述べている。

「今日、先生達が教材の打ち合わせをしているのを見

て、生徒に興味を持ってもらうための努力や工夫は惜しんではいけないということを感じました。日常生活の中でも常に教材研究をしているということなのですよ。先生が＜生徒に教材や授業が届いたときはすごく嬉しいし、次、頑張ろうって気になる＞とおっしゃっていたことが、私にも完全な形で理解できる時が早く訪れたらいいな、と思います。その日のためにも素敵な授業をする努力を惜しまないようにしたいと思いました。」

また、指導教諭は授業に対する考え（授業観）を、実習録に記している。「教師にとって＜授業が命＞と私はいつも思っています。もちろん学級指導や生徒指導、事務的な仕事、雑多なさまざまな仕事があり、それらをなおざりにすることはできませんが、授業でしっかりと生徒と結びついていれば、そこに信頼関係が生まれ、生徒との人間関係もクラス運営もうまくいくと考えています。授業の研究には相当の力をかけます。」

これは、現実に授業を担当している教諭としての言葉であり、最も基本的なことは家庭科の授業をしっかりと行うこと、それは生徒の側に立った共感的な理解のもとに行われる授業であり、そのことにより生徒に授業の意図が伝わり、自ずと生徒との信頼関係が育まれるということである。言い換えれば、授業に向ける情熱、そして生徒を深く意識した授業は自ずと生徒との間に信頼関係を生み、その相乗効果において教育の目標に近づくことができる、との示唆であろう。

今回、主として実習生Aの実習録並びに実習報告会資料を通して、教育実習生の「分かりにくい授業」がどのようにして「分かる授業」へと変容するのか、その要因を考察してきた。その結果、基本的には実習生の教材研

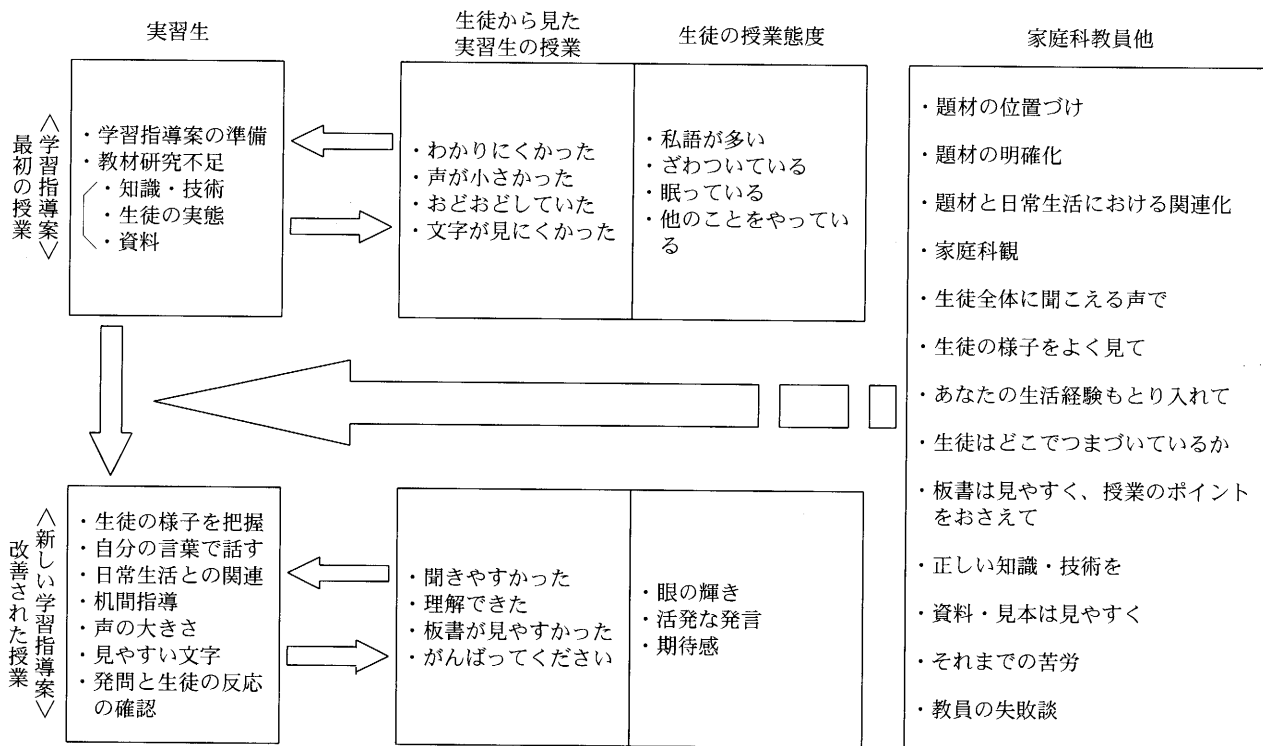


図1 指導教諭-教育実習生-生徒の三者間の相互作用

究の精緻化と教職への意欲や関心の向上、指導教諭による大所高所からの指導や助言並びに援助、生徒と実習生との信頼関係、等が不可欠であり、それらの相互関連のもとに「分かる授業」が形成されていく、ということが具体的に読みとれた。つまり授業の変容は、図1に示したように指導教諭—実習生—生徒の三者間における望ましい相互作用によってもたらされるということである。教育実習の最終日、指導教諭は実習生Aに対して次のような温かいことばを書き記している。

「3週間、緊張や不安で本当に疲れたと思います。手を抜くことなく、精一杯の努力をしてくれました。貴女の前向きな姿勢と努力、そして、ものごとを見る目、感性、とてもすばらしく、私も貴女から多くのエネルギーをいただきました。是非、同じ仲間として働きたいと思います。そして、これから、さらに自分を磨いて、より魅力的な人になってください。」

以上から、わずか3週間という短い実習期間ではあったが、実習生は授業実習を通して、学び甲斐や教え甲斐といった貴重な体験をしており、人間的にも大きな成長をした様子が伺える。

(2) 訪問指導報告書から

実習校への訪問は本校では、原則として訪問可能な埼玉・東京・神奈川・千葉の4都県並びに訪問要請のあった実習校に対して行っている。以下は本年5月から6月に本学教員9名によって行われた教育実習校33校の訪問記録の分析である。

<実習校指導教諭からのことば>

大方の学生は「熱心、まじめ、一生懸命、努力している、前向きな態度、素直、よくわかっている、教材作り・教材の提示の方法・授業の流れ等いろいろ工夫がある」等、多くの好意的なことばを得た。また実習生が高校生であった時と比較して、よくぞここまで育ててくれたと本学の教育に感謝の意を示してくれた高校もあった。

しかし一方で、「気軽でのんびり」の学生もいて、学生ことばや板書の文字（もっと丁寧に！）の指摘もあった。また、実生活に即した教材作りの工夫がほしいなど学習指導上の創意工夫を促された学生もあり、今後の指導を考えたい。

<訪問者の評価>

多くの実習生は実習校から好意的に受け入れられていた。例えば「女子栄養大学の学生だから」ということで食物領域を担当した例も多い。訪問者の印象は概ね次の2つにまとめられる。

- * 実習生は直接指導を受ける家庭科担当者だけでなく、実習校の先生方に温かく見守られていた。
- * 直接指導を受ける教諭からは丁寧に良く指導して頂いている。そして、学生は伸び伸びと生き生きと楽しく、授業を展開していた。

しかしながら、実習生の授業を検討するといくつかの問題点が見えてくる。

- * 自分の知っている知識をあれもこれも伝えたくて盛り

沢山となり、授業のねらいがぼやけ知識伝達型の授業となり、生徒に考えさせる授業が展開できない。例えば、卵の学習では、栄養価、鮮度の見分け方、卵の構造に偏り、健康・生活の視点に欠けた授業もあった。つまり科学と生活、科学の目で生活を見つめ直すなどの、発展に乏しい授業もあった。

- * 調理実習の目的の把握が不十分で食材選択の意図の生徒への伝達が不十分なケース（たとえば、青椒肉糸の肉が豚のバラ肉あり、牛肉や鶏肉あり）があった。
- * 食物、被服以外の領域、特に家族・家庭経済の領域の授業では実習生に教材研究の不十分さが感じられた。
- * 家庭科の授業への一人一人の生徒の興味・関心・技能の違いがあり、授業に意欲を示さない生徒への対応に工夫が必要だ。一方的な授業展開となり、「生徒不在」の授業もあった。

実習生は豊富な知識を持ちながら、それを中学校、高等学校の家庭科教育と関連づけて生活化された、焦点をしばった内容とすることができず、断片的な知識伝達の授業で終始する傾向がみられる。大学で学んだ事柄を自分のものとし、中・高校生の実生活で実践し得る内容へと発展させながら授業する力をつけさせることが課題である。

(3) 教育実習校の報告書から

3～4週間の教育実習を終えると実習校から成績報告書が送付される。成績報告書は出欠状況と共に、事項別評価と総合評価とに分けて段階評価され、それぞれに所見が付され返送される。大学では、成績報告書に基づき、さらに教育実習事前・事後指導の出席状況も加味して、教育実習の評価を行う。ここでは実習を終えた57名について、実習校における実習の出席状況と評価等を示す。

(i) 出席状況

実習校により多少異なるが、15～18日の実習期間中、全員が一日の欠席・遅刻もなく、無事に実習を終えることができた。

(ii) 事項別評価

評価事項は、教材研究、教科指導の技術、学級経営・生徒指導、教職への関心、事務処理能力、他人との協力の6項目で、これらは主として教職に就いた場合の不可欠な条件である。

評価事項についての評価を見ると、例年、教材研究、教職への関心、他人との協力、等については高い評価のA（優れている）が多く、教科指導の技術、学級経営・生徒指導、事務処理能力については個人差もあり、AとB（普通）とに評価が分かれる傾向にある。教科指導の技術と学級経営・生徒指導の項目は、教師になったその日から取り組む重要な内容ではあるが、実習に参加して初めての経験で、学生にとっては思うように成果を上げることができないため、やむを得ない傾向であろう。しかし教科指導の技術に関しては、「日を重ねる毎に上達している」との所見も見られ、57名のうち8名は全項目にAの評価を得ている。

(iii) 総合評価

総合評価はA～Dの4段階で付けられる。(A:教育実習生として優れている, B:普通である, C:やや劣っている, D:教職には適していない)

本年度教育実習生の総合評価は, Aは41名(71.9%), Bは16名(28.1%), C・Dは幸いに該当者がいなかった。

数字にも見られるように, 実習生の7割以上が「教育実習生として優れている」との評価を得ている。これは例年同様の傾向にあり, 多くの学生が教育実習に真剣に取り組み, 日頃の大学教育の成果の一つの表われであろう。実習生のほとんどが「教育実習を, 今まで経験したこともないほどの充実感をもって終わること, 指導教諭を始め諸先生方の温かい指導, また協力してくれた生徒に心から感謝したい」旨の感想を, 教育実習録の最終ページで率直に記している。

総合所見の中で, 「教育現場での活躍を祈る」「教師にふさわしい資質は十分あると思われる」「今後, 生徒と共に学び, 成長することのできる教員として期待できる」と, 学校長並びに指導教諭より, 今後への期待がよせられた学生が20名(35%)もいたことは特筆すべきであろう。

IV 教育実習事後指導について

1. 教育実習報告会資料から

教育実習終了後, 学長以下関係教員出席のもとに「教育実習報告会」を開催している。教育実習を終えて「教育実習で心に残ったことー生徒のこと, 授業のこと, 教師という仕事のこと」というテーマのもとで学生一人一人に2分から3分の発表を求めた。またそれに先立ち「報告会資料」の提出を求めている。本年度の報告会資料並びに発表からみると次のような内容が多かった。

- ・生徒とのコミュニケーションの大切さと楽しさを感じた。
- ・教師という職業のやり甲斐と大変さを感じた。
- ・発言や行動の重さを自覚し教師の責任を感じた。
- ・教育・指導については, その難しさを理解した。
- ・生徒は, 授業に敏感に反応するということを実感した。
- ・調理実習は予測できないことの連続で, 臨機応変の指導の大切さを感じた。
- ・授業参観を通して, 先生による違い, 教科による違いがあり授業の展開の仕方が様々あることを実感した。
- ・家庭科教育の果たす役割の大きさを理解した。
- ・被服実習では, 生徒の技術的な能力による進度の違いに対応した授業をすることの難しさを感じた。
- ・調理実習は, 生徒にとって楽しいものではあるが, 教師にとっては講義以上に安全・衛生の面など気をつける必要性を感じた。
- ・家庭科の内容は, 他教科との関連も強いものであることが分かった。
- ・自分自身の反省として知識不足, 技術の未熟さを感じた。

以上から, 教育実習事前指導を受講後, 教育実習への抱負を述べていた学生は, 教育実習経験後, 現実を直視してその厳しさを実感している。しかし, その反面, 生徒との人間的コミュニケーションをもつことにより, 教職のやり甲斐・魅力をも感じとった学生も多い。

2. 教育実習後の学生の意識変容

ここでは, 教育実習報告会の際に実施した質問紙法による調査結果(表10)にもとづいて, 実習生の意識が実習後どのように変化したのか分析をしていきたい。質問項目は, (1) 実習後における日常生活の変化についての8項目, (2) 教職そのものの意識の変化についての5項目, (3) (教師になるとしたら, 自分が) 今後身につけるべき事柄についての12項目であり, 5段階評価で回答を求めた。特に(2)ならびに(3)では, 実習前と実習中・後のそれぞれについての回答を求めた。(1), (2), (3)の項目は, 教職関係科目ならびに教育実習事前指導において, 教科の別を問わずその理解の必要性が説かれるものである。これらはまた, 小澤らが平成11年度科学研究費補助金の助成により関東地区の大学, 419名の教育実習生を対象に調査した質問紙法による項目の一部でもある。平成12年度本学科学専攻教育実習生にも本調査を実施した(表11)。それらとの比較対照の意味でも, 今回これを用いることにした⁴⁾。

まず, 15年度の(1)日常生活における態度や関心の変化の項目に関して, 5段階評価平均値を見ると, 8項目中の6項目が4以上の平均値であり, これらについては肯定的な見方をしていることがわかる。最も高いのは, 「道徳的問題を真面目に考えるようになった」であり, 次いで, 「人間関係を大事にするようになった」, 「相手の気持ちを考えるようになった」と続いている。教師間, 生徒間, 他の実習生間など, 様々な面から人間関係のあり方を自覚したといえよう。これは, 教育実習生の「実習報告資料」の中でも示されている。また, 前述の科研費による調査結果ともほぼ同様の傾向である。一方, 「生活が規則正しくなった」, 「話すことが論理的になった」はさほど高くない。これもまた, 前述の調査結果と同様の結果であるが, 特に, 規則正しい生活については, 本学学生の場合, 早朝からの時間割の多い生活に慣れていることもあって, 影響を受けなかったとも考えられる。

両年度を比較して調査結果が大きく異なるのは, 「(公共心等) 道徳的問題を真面目に考えるようになった」という項目である。12年度の場合, 5段階評価平均値は3.9であったものが, 15年度では4.7と高くなっている。この理由としては, 生徒の行動が道徳的側面で12年度と15年度では大きく変化したとも考えられるが, 15年度の教育実習生は実習期間の延長により, 生徒と触れ合ったり生徒を観察する時間も増え, 道徳的問題を考える機会が12年度の2週間実習の時より多くなったのではないかと考えられる。

また, 「話すことが論理的になった」, 「人間関係を大

表10 教育実習による意識変容（平成15年度）

あなたの教育実習をふりかえって、あなたの意識はどのように変わったと思いますか。

以下の各項目について、() の中に下記の尺度「1」～「5」の数字を記入して、あなたの気持ちを表してください。

	5	4	3	2	1
	強く そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそうは 思わない

(1) 実習体験後、日常生活において 5段階評価平均値

・自らの学習に真剣になった	()		4.2
・生活が規則正しくなった	()		3.3
・教育問題について関心が強くなった	()		4.3
・話すことが論理的になった	()		3.6
・相手の気持ちを考えるようになった	()		4.4
・人間関係を大事にするようになった	()		4.5
・積極性が出てきた	()		4.2
・(公共心等) 道徳的問題を真面目に考えるようになった	()		4.7

(2) 教職そのものについて

*左側の () の中には実習前の自分の意識を、右側の [] の中には実習後の意識を、「1」～「5」の数字で記入してください

	実習前	実習中・後	実習前	実習中・後
・非常に魅力を感じる仕事である	()	[]	3.2	4.5
・子どもの成長・発達に関わる重要な仕事である	()	[]	4.3	4.9
・子ども愛・教育愛にささえられた尊い仕事である	()	[]	3.8	4.7
・自主的・創造的な活動ができる仕事である	()	[]	3.5	4.4
・理想とする社会の実現に貢献できる仕事である	()	[]	3.3	3.9

(3) (教師になるとしたら自分が) 今後身につけることがら

*左側の () の中には実習前の自分の意識を、右側の [] の中には実習後の意識を、「1」～「5」の数字で記入してください

	実習前	実習中・後	実習前	実習中・後
・幅広く深い一般教養	()	[]	4.1	4.9
・専門分野(教科専門)の学力	()	[]	4.5	4.9
・教職に関する基本的な教養	()	[]	4.2	4.8
・学習指導の理論と技術	()	[]	4.3	4.8
・生徒指導・生活指導の理論と技術	()	[]	4.1	4.7
・教師集団の一員としてのあり方	()	[]	3.8	4.6
・子どもの人権についての理解	()	[]	4.0	4.6
・社会性	()	[]	3.9	4.7
・優れた人格	()	[]	4.2	4.6
・豊かな人生経験	()	[]	4.3	4.8
・充実した体力	()	[]	4.2	4.9
・何らかの特技	()	[]	4.1	4.7

事にするようになった」の項目が、12年度の数値よりも若干であるが高くなっているのは、15年度の方が授業実習の回数も増加したからとみることができよう。

15年度の場合、(2)の「教職そのものについて」は、実習中・後の5段階評価平均値は、実習前よりも高くなっ

ている。とりわけ、実習前と中・後で大きな差異のあるのは「教職は非常に魅力を感じる仕事である」の項目である。これは12年度調査とも同様の結果である。短い期間であったとしても、ともかくも教師の仕事の現実に触れて、その職業の意味を考えさせられたことが伺える。

表11 教育実習による意識変容（平成12年度）

あなたの教育実習をふりかえって、あなたの意識はどのように変わったと思いますか。

以下の各項目について、() の中に下記の尺度「1」～「5」の数字を記入して、あなたの気持ちを表してください。

	5	4	3	2	1
	強く そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそうは 思わない

(1) 実習体験後、日常生活において 5段階評価平均値

・自らの学習に真剣になった	()	4.5
・生活が規則正しくなった	()	3.5
・教育問題について関心が強くなった	()	4.3
・話すことが論理的になった	()	3.2
・相手の気持ちを考えるようになった	()	4.2
・人間関係を大事にするようになった	()	4.5
・積極性が出てきた	()	4.1
・(公共心等) 道徳的問題を真面目に考えるようになった	()	3.9

(2) 教職そのものについて

*左側の () の中には実習前の自分の意識を、右側の [] の中には実習後の意識を、「1」～「5」の数字で記入してください

	実習前	実習中・後	実習前	実習中・後
・非常に魅力を感じる仕事である	()	[]	3.6	4.5
・子どもの成長・発達に関わる重要な仕事である	()	[]	4.4	4.8
・子ども愛・教育愛にささえられた尊い仕事である	()	[]	3.8	4.5
・自主的・創造的な活動ができる仕事である	()	[]	3.8	3.9
・理想とする社会の実現に貢献できる仕事である	()	[]	3.5	3.7

(3) (教師になるとしたら自分が) 今後身につけることから

*左側の () の中には実習前の自分の意識を、右側の [] の中には実習後の意識を、「1」～「5」の数字で記入してください

	実習前	実習中・後	実習前	実習中・後
・幅広く深い一般教養	()	[]	4.3	4.8
・専門分野(教科専門)の学力	()	[]	4.6	4.9
・教職に関する基本的な教養	()	[]	4.2	4.5
・学習指導の理論と技術	()	[]	4.3	4.7
・生徒指導・生活指導の理論と技術	()	[]	4.1	4.7
・教師集団の一員としてのあり方	()	[]	3.5	4.4
・子どもの人権についての理解	()	[]	3.7	4.4
・社会性	()	[]	4.1	4.5
・優れた人格	()	[]	4.2	4.5
・豊かな人生経験	()	[]	4.5	4.8
・充実した体力	()	[]	4.1	4.8
・何らかの特技	()	[]	3.7	3.9

それは12年度、15年度の両年ともに「子どもの成長・発達にかかわる重要な仕事である」、「子ども愛・教育愛にささえられた尊い仕事である」の項目に対しての数値の高さからも示される。

「理想とする社会の実現に貢献できる仕事である」の

数値は、両年度ともに実習中・後が前よりも高くはなっているが、実習中・後の他項目と比べると低い。近年、学校における教師、生徒の現実を目の当たりにし、理想的社会への変革の架け橋となるという職業観との結びつきは、困難であるのかも知れない。これらについては、

12年度もほぼ同様である。

(3) は、「自分が教師になるとしたら身につけるために必要」と思われる事柄を尋ねた項目である。15年度の場合、実習中・後では、全項目が5に近い平均値であるが、12年度では「何らかの特技」が3.9で、他項目と比較してやや低い。15年度のほうが生徒とコミュニケーションを持つ機会が増え、その折に特技を持っていることがそれを図る上で望ましいとみたのかもしれない。両年度ともに特に、「幅広い一般教養」、「教師集団の一員としてのあり方」では、実習中・後に大きく変化している。「専門分野（教科専門）の学力」については実習前も高い数値であったが、実習後はさらに高くなっている。これが高くなったということは、授業実習や教員としての仕事を体験して一層その必要性を感じたということに関連するであろう。

「充実した体力」については、実習前も必要なものとして高い数値であったが、実習中・後はなお一層高くなっている。実習録や実習報告においても教員の仕事の多忙さについて述べる実習生がいたが、多忙な仕事に対処していくためにもそれに応じた体力が必要と実感した学生も多く認められ、それが数値で裏付けられたといえよう。

前述の科研費による調査でも、実習前と中・後で大きな変化のあったのは、「幅広く深い一般教養」、「教師集団の一員としてのあり方」、「体力の充実」であり、両年の本学の調査と同様である。

12年度調査、15年度調査ともに全般の傾向としては同様であり、実習が期間の長短を問わず、学生の内的成長にいかにか大きな影響を及ぼしているかを理解することができる。

15年度調査の結果からいえることは、3ないし4週間実習は、2週間の場合よりも、余裕をもって自分を振り返ったり、学校組織、教育内容、教育方法・技術、教師のあり方、生徒の実情について深く考える機会を実習生に与えているといえよう。このことは、2年制大学における調査によって示される結果とも同様である⁹⁾。

しかし、期間延長がすべてこれらを保障するものではない。学校現場への多大な負担の中で実習は行われるものであるから、現場における学生への指導者側とそれに対する学生の受けとめ方の間に齟齬が生じることもある。それはしばしば実習の質の低下を招くことにもつながる。実習について事前・中・後ともに大学側は学校現場と絶えず意思疎通を図る努力が必要とされる。

おわりに

12年度並びに15年度の教育実習に関する資料及び事後の質問紙による調査等をもとに、教育実習の概況並びに教育実習による学生の意識の変容を見てきた。12年度と15年度では期間の相違があったとしても、学生は確

実に教職についての理解及び社会人としての視野を広げていることが明らかになった。例えば、万全に準備をして授業に臨んでも、生徒の人間性をおろそかにしてはよい授業にはならないと感じたなどである。また、大学での机上の学習を実際の授業場面に活用、応用することの難しさを実感し、さらにその研修を深める必要を痛感している。「生徒が生きる授業」をするには、幅広い人間としての教養が必要であり、人間関係に温かく向き合うことが大切であるなど、学生の人格の成熟が図られ意識の深まりがあったことは、教職に止まらず将来社会人として生きていくためにも貴重な変容であった。

教育実習は教職の一科目ではあるが、一般教育、専門教育とも深い関連をもっている。一般教育で目指している幅広い教養の修得に支えられた人間教育を基にした専門分野の習熟は、人間としての確とした自信となり、今後の変化ある社会を生きるためには重要なものである。

より効果ある教育実習を体験させるためには、本学の教職に関するカリキュラムや教育実習事前指導の在り方の検討が重要となる。今後は、多様に変化している生徒や教育現場に対応した内容について検討し、事例研究など具体的な内容・方法も取り入れながら、教育実践に直接関連する教科並びに生徒指導のあり方を検討していく必要がある。また、学校現場と大学教育とが相互交流を結び、教育の臨床上の問題にも対応できるような機会を持つことも望まれよう。

学生がより高い資質、能力を身につけ教育実習に臨むことは、大学教育の質や評価を高めることにもつながる。このことから、今後、教職課程カリキュラムの検討ばかりでなく、学校現場での教育実習（観察・参加・実習）の内容の検討をも研究課題とし、教職に関する教育の更なる充実を図っていきたい。

参考並びに引用文献

- 1) 鈴木慎一、仙崎 武：教育実習－教育実地研究。（鈴木慎一、仙崎 武編著）、p8-18、ぎょうせい、東京（1990）
- 2) 細谷俊夫：新教育学大事典 全8巻2. 教材研究（細谷俊夫編著）、p442-444、第一法規出版、東京（1990）及び教育学大事典（1979）
- 3) 尾崎沙和子、小澤滋子、野尻幸子、日高英行：教育実習にかかわる指導についての考察。女子栄養大学紀要、第18巻、p213-230、香川栄養学園、東京（1987）
- 4) 町田健一、坂本信昭、黒澤英典、小澤滋子、次山信男：平成10年度－平成11年度科学研究費補助金研究成果報告書「教育実習及び介護等体験の教育的意義と内容方法に関する総合的調査研究」。教育実習校（中学校）における実習生の受け入れ体制に関する調査（中学校教員）、教育実習に関する意識調査（教育実習生）（黒澤英典編著）、p29-56（2000）
- 5) 清水康幸：3週間実習に送り出して。会報、第53号、p26-55、関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会、東京（2002）